



確認問題

古典に親しむ

要点1 歴史的仮名遣い・古語の意味 難易度 ★★☆☆

1 次の古文と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かかるほどに、宵^ようち過ぎて、^①子の時ばかりに、家のあたり、昼の明^{あけ}さにも過ぎ
て、光りわたり、望月^{もちづき}の明さを十合^{とくあは}せたるばかりにて、在る人の毛の穴^{あな}さへ見ゆる
ほどなり。大空より、人^②、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほど
に立ち列^{つら}ねたり。内外^{うちと}なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はむ心も
なかりけり。からうじて、^d思ひ起こして、弓矢をとりたてむとすれども、手に力も
なくなりて、萎^なえかかりたり。中に、心さかしき者、念じて射^やむとすれども、^③ほか
さまへいきければ、あひも戦はで、心地、ただ痴^ちれに痴れてまもりあへり。
立てる人どもは、装束^⑤のきよらなること物にも似ず、飛ぶ車^⑥一つ具したり。羅蓋^{らがい}
さしたり。

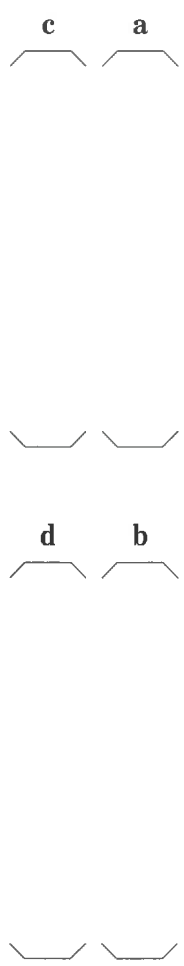
(「竹取物語」)

現代語訳

こうしているうちに、宵も過ぎ、夜中の十二時ごろに、家の辺りが、昼の明るさより以上に、光った。満月を十も合わせたほどで、そこらにいる人の毛の穴さ見えるくらいである。大空から、人が、雲に乗って下りて来て、地面から五尺くらい上がった高さのところに立ち並んだ。(これを見て、かぐや姫の家の)内や外にいる人たちの心は、物のけにおそわれるような気持ちであって、戦い合おうという心もなくなった。やつのことで、気持ちを奮い起こして、弓に矢をつがえようとしても、手に力も入らなくなって、(体全体がしびれて)物に寄りかかってしまった。中に、気のたしかな者が、(こらえて矢を射ようとしても、(矢は目標から外れて)よそのほうへ行つたので、戦い合うこともなく、気持ちがあひたすらにほんやりとするばかりで、(天人のほうを)じっと見つめているだけであつた。

立っている人たちは、その衣装の美しいことといったらたとえようもなく、飛ぶ車一つともなっている。うす絹で作った豪華な日よけ傘をさしている。

(1) 線の a「十」、b「さへ」、c「おそはるるやうにて」、d「からうじて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。



(2) 線①「子の時」とはいつですか。現代語訳の中から書き抜きなさい。



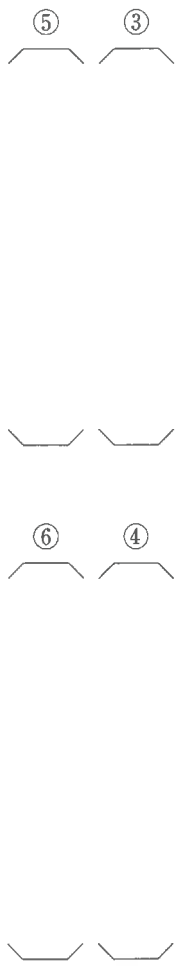
(3) 古典では、物の長さや高さを表すのに、現代とは違う単位が使われます。この古文では、具体的な高さがどんな言葉で表されていますか。二字で書き抜きなさい。

□

(4) 線②「人」と同じ人々を表す言葉を、古文の文章中から探して書き抜きなさい。



(5) 線③「ほかさま」、④「まもりあへり」、⑤「きよらなる」、⑥「具したり」は、文章中ではどんな意味ですか。それぞれ書きなさい。



学習した日
/ /
()分

学習した日
/ /
()分

要点 2 古典文法の基礎

難易度 ★★

1 次の古文と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中將、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、

こまごまと奏す。薬の壺に御文そへて参らす。ひろげて御覽じて、いとあはれがら
せたまひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、

「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にある山
この都も近く、天も近くはべる」と奏す。〔竹取物語〕

現代語訳 中將は、人々を引き連れて（帝の宮殿に）帰参して、かぐや姫
を戦つて（この国に）ひきとめることができなかつたことを、こと細かく帝に
申し上げる。（かぐや姫が置いていった）不老の薬が入った壺に、かぐや姫の
手紙□そえて帝にさし上げる。それをひろげて御覽になつて、ひどくしみじ
みとした気分におなりになって、何もお食べにならない。音楽の演奏などもな
かつた。大臣や上達部をおよびになつて、「どの山が天に近いか」とお問いに
なると、ある人が「駿河の国にある山が、この都にも近く、天にも近うござい
ます」と申し上げる。

(1) 線①「御文」のあとに補つて訳すとよい助詞は何ですか。

(2) ひらがな一字で書きなさい。

ア 帝 イ かぐや姫

ウ 中將 エ ある人

② ③ ④

(3) 古文の文章中の□に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さへ イ なむ
ウ より エこそ

要点 3 故事

★

1 次の故事と現代語訳の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

虎、百獸を求めてこれを食らふ。狐を得たり。狐曰はく、「子敢へて我を食らふ
ことなかれ。天帝、我をして百獸に長たらしむ。今、子、我を食らはば、これ天帝
の命に逆らふなり。子、我をもつて信ならずとなさば、吾、子がために先行せん。
子、我が後に従ひて、百獸の我を見て、敢へて走らざるかを観よ。」と。虎、もつ
て然りとす。故に遂にこれと行く。獸、これを見て皆走る。虎、獸の己を畏れて
走るを知らざるなり。おもへらく、狐を畏るるなり、と。〔戦国策〕

現代語訳 虎は、すべての獸をえじきの対象としている。ある時、狐を捕らえ
た。狐が言うには、「あなたは、すすんで私を食べてはいけません。天の神は、
私をすべての獸の王にさせている。今、あなたが私を食べれば、天の神の御意
志に逆らうことだ。あなたが私を信じられないなら、私が、あなたのために先
に立つて行きましょう。あなたは、私の後に従つて、すべての獸が私を見て
□よく見なさい。」と。虎はもつともだと思つたので、とうとう狐の言う
まま狐と歩いた。獸はこれを見て皆逃げた。虎は、獸が自分をおそれて逃げた
のを知らなかつた。虎は、（獸たちが）狐をおそれている、と思つたのだ。

(1) 現代語訳の中の□にあてはまるものを次の中から一つ選び記号で答えな
さい。

ア すすんで逃げるかどうかを イ なぜ逃げないかを
ウ だれも逃げないのを エ どうして逃げるのかを

(2) この文章の話からできた故事成語として適切なものを次の中から一つ選
び、記号で答えなさい。

ア 虎穴に入らずんば虎兇を得ず イ 虎は死して皮を留む
ウ 虎の威を借る狐 エ 虎、ねずみに変ず